

21 世紀における惑星的想像力 globe の濫喩についての一考察

下 河 辺 美 知 子

はじめに：グローバリズムと 20 世紀アメリカ

20 世紀はアメリカの世紀であった。この歴史的事実が、あることを見えなくしているのではないかという警告から本論を始めたい。あることとは、globalism という言葉がその指示作用を吟味されることなく America という記号と重ねられてきたことである。現在の国際社会で唯一の価値とさえ見なされている globalism の中では、すべての価値が America を基準とする尺度によって評価され、すべての意味が America というコンテキストの中で創出されている。しかし、21 世紀に入り、あまりに自然つなげられてきた globalism と America という二つの記号の絆をほどいてみようとする動きが人文科学の領域において始まっている。

発端は、ガヤトリ・スピヴァク (Gayatri Chakravorty Spivak) 著『ある学問の死』(2003) の中にあった。スピヴァクは「地球 (the globe) を惑星 (the planet) で上書き (overwrite) することを提案する」(Spivak 72) と宣言したのである。この要請については、政治的、経済的、文化的、軍事的解釈が可能であろう。しかし、本論では、「上書き」という言葉を文字通り記号操作についての意味と受け取ってみようと思う。つまり、globe と planet という言葉の根源的指示作用の通時的検証を行うことで、スピヴァクからの提案を、記号 (signifier) と指示対象 (signified) の関係の中で再検討してみたいのである。

『ある学問の死』第三章「惑星的なありかた」(Planetarity) で、スピヴァクは、新たなる集合体の形を「惑星的なもの (planetary)」(Spivak 72) と呼び、「その言葉 (planetary) を呼び出す (invocation) こと」に「どのような努力 (effort) が暗に秘められているかを説明させてほしい」(Spivak 72) と述べている。21 世紀の現在、planet という signifier (記号) を、彼女が指示させようとする signified (指示対象) に届かせることは困難なのだ、と我々は知らされる。そして、その困難をもたらす最大の理由は、globalization という言葉が強力な指示作用を発揮しているからなのである。スピヴァクがこの言葉をどのような指示対象とつなげているのかを見てみよう。

Globalization is *the imposition of the same system of exchange everywhere*. In the gridwork

of electronic capital, we achieve that abstract ball covered in latitudes and longitudes, cut by virtual lines, once the equator and the tropics and so on, now drawn by the requirements of Geographical Information Systems. (Spivak 72. italics mine)

「同一の為替システムをいたるところに押し付けること」というスピヴァクの言い方によれば、globalization とは、地球表面全体を一つの交換原則が支配する空間で塗りつぶす‘運動’である。「為替システム」という表現は経済用語であるが、そのシステムは、政治、文化、言語の中でも同様に稼働し、ある価値観を創り出す。その結果、世界は「地理情報システムの要求するところから従って引き直された仮想上の線」で刻まれることになるのであるが、そこではどんなことが起こるといえるのだろうか？ 巽孝之は『モダニズムの惑星』(2013)において次のように言っている。「ここでは、グローバリズムの根幹をなす『地球』が、コンピュータ上の電脳空間において腑分け可能な時空間として、そこには誰も暮らしていないのに制御可能に見える時空間として再定義されている。」(巽 8)

スピヴァクのグローバリゼーション批判はここまでくれば明らかであるが、さらにその批判の根源にあるものが何であるかを見てみたい。そこに見え隠れするのは、‘capital’ という単語である。我々が住まうこの地球は、“the gridwork of electronic capital” (Spivak 72) であり、我々が生きる時代は、“this era of global capital triumphant” (Spivak 101) である。そして、資本主義が労働と金銭、あるいは商品と金銭との交換によるシステムであるとすれば、20世紀に覇権をほこった資本主義超大国アメリカが globalization と重ねられることに何の不思議もない。

我々は、情報、ことに資本主義の血液ともいえる為替レートや株価などの金融情報が一瞬のうちに駆け巡る電脳空間となった球体の上に生きている。情報はあふれるように降り注ぐが、それ故に、「種々の他なるもの (alterity)」(Spivak 72, 73, 81) は均一化の暴力によって透明にされ不可視化されていく。グローバリゼーション批判として「惑星的なあり方」が提案されるのはこうした状況を見据えた結果であった。

スピヴァクは2003年の『ある学問の死』の出版の後、自らがとなえた惑星思考という概念を一旦は放棄している¹。しかし彼女が21世紀世界に提示したものは、以後、さまざまな批評家たちに影響を与え、さらなる議論を掻き立てたことは明らかである。例えば、ワイチー・ディーモック (Wai Chee Dimock) は“planetary”という言葉に「決して実現されることのない地平」(Dimock 6) と解釈する。そして、「まさにその理由のために、彼女 (スピヴァク) は (それを実現するという) 冒険をやってみると我々を駆り立てているのだ」(Dimock 6) と言って、惑星としての地球に流れる「深い時間 (deep time)」の議論を持ち出している。また、巽孝之はその著書『モダニズムの惑星』の中で「スピヴァクの『惑星思考』がポストコロニアリズムの批判的発展としての概念だったとすれば、本書における『惑星思考』はポスト・スピヴァクの批判的発展をもくろむ理論である」(巽 24) と述べ、それをふまえた形で自身の「来るべき惑星思考」(巽 234) を展開している。

本稿はこうした試みを受けた形で、惑星的想像力の開発・実行についての小さな提案をするものである。ただし、デューモックや巽の仕事がグローバリゼーション批判の上に立って planet という概念を深めたのに対し、本稿では「上書きされるべき」として否定された globe という言葉に立ち戻ってみたい。歴史的に globe の意味の変遷をたどりつつ、記号としての globe が新たな指示対象を引き寄せる可能性を検討することにより、21 世紀的惑星思考を再提出してみたい。

1. globe をめぐる catachresis

『ある学問の死』の最後で、スピヴァクは自らが持ち出した「惑星」という言葉について以下のように言っている。

The “planet” is, here, as perhaps always, a catachresis for inscribing collective responsibility as right. (Spivak 102)

「惑星」という言葉を「集合的応答可能性を権利として記銘するための濫喩（カタクレシス）である」と言うとき、planet とは、signifier により signified が特定される通常の記号を超えたものになっている。スピヴァクが planet という言葉に託そうとしたものは、時と場合によってさまざまな signified へ届く＜記号の指示力そのもの＞を指し示すメタ記号としての機能なのである。ならば、planet という言葉を検証する前に、スピヴァクによって上書きされ削除された globe という言葉の＜記号の指示力＞を、今一度、歴史的に検証してみよう。

まず、catachresis の意味について確認しておきたい。「濫喩」という日本語があてはめられる catachresis には、言語記号の使用にあたって次の二通りのケースがあるとされている²。一つは、ある言語が、そのときの現実社会にないものを指し示すことである。つまり、ある signifier を、現実には存在しない signified につなげるという形での記号の濫用である。今一つは、ある言語が、現実社会に存在するものを指し示すが、その社会の中で自然につながれるはずの signified とは別のものを指し示すときである。こちらは、ある signifier を、共同体の人間から見ると違った意味となる signified につなげるという形の記号の濫用となる。そこで我々が関心を寄せている globe という記号について考えてみたい。惑星思考の出発点となる globe という言葉の指示性を根源的に検証して、catachresis という現象を通時的に体験してみたい。

私たちは自分たちの立つ地面・土地・大地・国土・領地を指し示すのにどのような用語を使ってきたのであろうか？ まず確認したいのは、globe とはもともと「幾何学の用語としての sphere（球体）」の意味であったことである³。言語記号としての globe という signifier は、自らの手でさわり、自らの目でみることのできる具体的形象としての球体という signified とつながっていたのである。であるから、地球が球体であるという認識がもたらされるまでは、自分の立っている地面を globe という言葉とつなげようとすれば、それは、現実社会にないものを指すという意味での「濫用」であった。

16世紀に入り、限りなく拡大する平面と思われていた大地と海が球体をなしているという新しい洞察がもたらされる。マゼランたちの命をかけた航海により、globe という signifier は「地球」という巨大な signified とが繋がれたのだった。幾何学用語であった globe は、新しく開けた世界観の中で「地球」という指示対象を獲得し、別の名詞となったのである。マゼランの世界一周旅行は1519 - 1521年であるが、*OED* で globe が the earth の意味で使われた初出は1553年となっている。

21世紀の今、地球を指し示す globe という言葉から globalism や globalization という新たな言葉が派生し、全世界を席卷する勢いで我々の生活のすべての面を覆っている。名詞に -ism が加えられるとき、それは、社会が行くべき方向を指し示すイデオロギーとして共同体にある価値観を押し付ける言葉となる。とはいえ、世界の趨勢を見ていると、国際社会は globalism を「押し付け」とは考えず、むしろ歓迎しているように見える。政治・経済・教育・マスコミは、未来のあるべき世界の姿として globalism にたいして肯定的な意味を付加しようとやっきになっているからだ。一方の globalization という言葉も同様である。-ize という接尾語を加えることで、それは「運動」となり、今や「global にする、になる」という動きは世界規模のうねりとなっている。

「球体」という幾何学用語から、「地球」という天文学・地質学の名詞へと指示対象を広げてきた globe という記号に、こうして経済的・政治的・文化的意図が込められるようになり、その結果、global という価値が21世紀世界を覆っている。20世紀の覇者であるアメリカとそれが体現する資本主義が、globalism という言葉に上滑りして重なることは、こうしてみれば当然のことだったのかもしれない。「電算化された資本の格子上配列のうちに緯度線と軽度線で覆われた抽象的な球体」(Spivak 72) を指し示す語として globe という記号を定義してみせたスピヴァクにとって、削除され上書きされるべき globe とは、濫用された結果、globalism という signified につながれて統一化の運動にからめとられた globe (地球) を指し示す言葉であった。本稿では、その globe という名詞を一旦「地球」という球体を指し示す globe 本来の意味に回帰させ、この記号が使用されてきた文脈を歴史的に振り返ることで、globe という語の signifier と signified の絆を今一度探り直してみたいと思っている。

2. continent の catachresis

地球が球体 (globe) であることの発見と確認は、ヨーロッパ人たちに「西への衝動」と「獲得する意図」という二つの精神的ダイナミズムをもたらした。西へ向けて航海に出ることは、陸から離れ大地から遠ざかるという意味で、地上を進む旅とは全く異なる精神的負荷がかかる冒険であったはずである。アメリカの西漸運動が、足で踏める安定した陸地の連続を拡張するものであったのと比べ、西への航海は、空間を超越するという精神的飛躍を要する行為であった。そして、西に進み始めたヨーロッパ人たちの精神は、以後、アメリカ大陸を通過して太平洋を越え、アジアへとそ

の衝動を貫いていったことは歴史が示している。

一方、獲得する意図は、東半球から西半球にむけて出航した当時のヨーロッパ人たちの基本的欲動であった。ヨーロッパ人たちはその欲動に駆られてある思い込みのもと行動したのである。大地にクワを入れることで土地の所有権を主張する西漸運動に比べ、航海の結果“発見”した陸地に対する獲得・所有宣言は、身体労働による獲得とは別の文化的・精神的構造の中で行われた。それは、自らが旅立ってきた地—それが王国であればなおのこと—に立つ自分を主体とみなし、海から上陸した土地とそこに先住する人々を、自分たちが獲得すべき客体とみなす欲動の表れであった。

コロンブスが第一回目の航海の時書き送った手紙のレトリックに、ヨーロッパ人としての獲得の意図がはっきり示されている。

And there I found *very many islands* filled with people innumerable, and of them all I have taken possession for their highnesses, by proclamation made and with the royal standard unfurled, and no opposition was offered to me. … I understood sufficiently from other Indians, whom I had already taken, that this land was nothing but *an island*. (Christopher Columbus' Letter to Luis de Santangel Regarding the First Voyage, February 15, 1493. italics mine)

「私は島をたくさん見つけたのですが、そこには人間がうじゃうじゃいます」と書き送ったコロンブスは、「殿下のためにそれらを獲得いたしました」と報告している。おもしろいのは「獲得宣言をして旗をたてても反対・抵抗にはあいませんでした」という部分である。遭遇した人々とコミュニケーションをとる努力をすることなしに、こちら側の文化的コード（宣言や旗を立てる行為）で所有権を主張する身振りは、見方によればドン・キホーテ的滑稽さを孕んでいるのだが、実際の歴史を見る限り、コロニアリズムはこうした素朴な行為の中で実行され、東半球の国々が西半球にむけた欲望の連環的運動となっていくたのである。

コロンブスがたどり着いたのは島々であったが、そこにもう一つ別の大陸（新大陸）があることを確認したのは、十年ほど後のアメリゴ・バスプッチである。彼は島々を巡ったコロンブスと違って陸地を見ながら航路を南にとっていった。彼は大陸発見の次第を以下のように書き送っている。

But this last voyage of mine has demonstrated that his opinion of theirs is false and contradicts all truth, since I have discovered *a continent* in those southern regions that is inhabited by more numerous peoples and animals than in our Europe, or Asia or Africa. (Amerigo Vespucci's Letter to Lorenzo di Pierfrancesco de' Medici, late 1502 or early 1503) (*New Literary History of America*, 3. italics mine)

文面には三つの大陸の名前—ヨーロッパ、アジア、アフリカーが記されており、この三つが当時ヨーロッパ人たちが知っていた大陸のすべてであった。それゆえ、コロンブスが見つけた陸地を海上から遠くに見つ南下し赤道を越えてもまだ陸地が続くことに、ベスピッチは驚愕する。その結果、赤道より南には大陸はないという説をくつがえしたベスピッチは四つ目の大陸、つまり、真の意味での「新大陸」の存在を確認したのである⁴。「私はこの南の地方（南半球）に“大陸”を発見した」と書き送ったアメリゴ・ベスピッチは、その名前を America という固有名詞として新世界に残したのである。

ヨーロッパ大陸から来た人間たちが、新大陸を「発見」「獲得」し、それを「植民地として支配」するというレトリックはこうして生まれてきた。以後、二百数十年にわたり、北米大陸と南米大陸は、ヨーロッパ的主体の欲望の対象に置かれることになる。そんな中、北米の東海岸に作られた植民地が百数十年の間に‘こちら側’の共同体を形成し、新大陸を代表して大西洋をはさんだ‘あちら側’との緊張を増大させて独立戦争に至る経緯はよく知られている。その間、イギリス本国を攻撃対象とするまでに新大陸内部で交わされた言葉は、対イギリスという共通の情緒を形成していくものであった。そうしたレトリックの中で、continent という記号がどのように濫用されてかを見てみたい。

植民地の人々の心に眠っていた意識を掘り起こし、抵抗への言語を与えたのは、イギリスからやってきた風来坊トマス・ペインであった。彼の書いたパンフレット『コモン・センス』は、その題名のとおり、常識についてのものであった。常識とされている常識をくつがえし、新世界にあらたな常識をもたらすためにペインが用いたストラテジーは、言葉の記号操作によって人々の精神に大変革をせまるものであった。中でも、continent という記号とその指示対象の関係を覆し、それによって、新しい指示対象を植民地の言語に滑り込ませる意図がこのテキストにはこめられていたのである。

当時 continent という言葉はヨーロッパ大陸を意味していた。しかし、ペインは『コモン・センス』の第三部「アメリカの現状を考える」において以下のように言っている。

The sun never shined on a cause of greater worth. 'Tis not the affair of a city, a country, a province, or a kingdom, but of *a continent* - of at least one eighth of greater worth. (Paine 82. italics mine)

ペインはイギリスに対する抵抗の兆しを事件 (the affair) 名づけ、それを「“一大陸” —少なくとも人間の住みうる地表の八分の一で生じた事件」と書いている。ヨーロッパ大陸を指していた continent という signifier を、新大陸という新たな signified へとつないだのである。こうしてペインは、continent という記号を植民地側の人々が立つ陸地へと横滑りさせ、その catachresis の中で人々の常識を覆す準備を行ったのである。

イギリスに対する地理的記号表現も精神的な大転換を促す勢いに加担する。イギリスは「360 マイルしかない細長いつらなり」(Paine 85) と名指しされ、その結果、イギリスはヨーロッパ大陸としてではなく、島として表象されたのである。

Small islands not capable of protecting themselves, are the proper objects for kingdoms to take under their care; but there is something very absurd, in supposing *a continent to be perpetually governed by an island*. (Paine 91. italics mine)

アメリカが島であれば王国が面倒をみるのにふさわしいかもしれないが、今や大陸という記号と結ばれたアメリカと島である英本国との関係について、ペインは新常識を持ち込もうとして次のように断言する。「大陸が島によって永久に統治されるというのは、いささかばかげている」と。こうして、island はイギリスという signified に、continent は植民地側という signified につなげられ、そのことによって、英本国との植民地の主従関係は逆転したのである。記号の革命 (revolution) はアメリカの独立革命に先立って起こっていたのである。『コモン・センス』第三部にはこのような形で使われた continent という語が計 35 個ある。

最終章第四部「アメリカの現状の力について、合わせて種々の意見を述べる」に入ると、それまで小文字の c でしるされていた continent は大文字の Continent と表記されるようになる。そこには記号の操作の中にさらなる思惑が込められている。『コモン・センス』の最後の文章は、以下の通りである。

…until an independence is declared, *the Continent* will feel itself *like* a man who continues putting off some unpleasant business from day to day, yet knows it must be done, hates to set about it, wishes it over, and is continually haunted with the thoughts of its necessity. (Paine 112. italics mine)

アメリカは成熟し独立した一個の生命体として擬人化されているのだ。独立宣言までの時間、「大陸」は「～をしている人間のように感じるであろう」というレトリックの中で、大文字の Continent は人間主体として意志を持つ。そこには、主体となった「大陸」が、自らの意思で独立を決意するという成長物語が立ち上がってくる。植民地側の人々がアメリカという新しい国家に自己同一化する回路はこうして開かれ、そこでは、continent の catachresis が巧妙に使われたのであった。

3. 半球による分割

独立から四十数年たった1823年12月2日、時の大統領ジェームズ・モンローは合衆国議会で第七次年次教書を読み上げた。それは6,383語の長文の文書であったが、その中に離れて置かれた二つのパラグラフ計956語が、以後、繰り返し取り上げられて、アメリカ外交政策を示す「教義」(doctrine) となっていく⁵。モンローの言葉は、19世紀から21世紀の各時代にそれぞれ独自の意味を付加されて、アメリカ合衆国が他の国家とどのような関係を結ぶかについての表明として、アメリカ政治・文化の中でくりかえし再利用されていくのである。

モンローのレトリックの根底にあるものは、「我々 (we, our) と彼ら (their)」の対立であるが、その対立を具体化する際、世界を二分するために使われたのが「半球」(hemisphere) という概念であった。

We owe it, therefore, to candor, and to the amicable relations existing between *the United States and those powers*, to declare that we should consider any attempt on their part to extend their system to any portion of *this hemisphere* as dangerous to our peace and safety. (Monroe 48-11 italics mine)

「友好的な関係のため」という文脈の中ではあるが、ここには「我々合衆国」と「彼ら列強諸国」という二項対立ができあがっている。そして、モンローは「彼ら」にむかって、「あちら側のシステムをこちら側に拡張しようとする試みがあれば、それを我々の平和と安全にとっての危険とみなすぞ」と敵対関係宣言をするのである。

ここで注目したいのは、このたった一文の中で、我々の側を示す言葉が the United States から this hemisphere へと置き換わっていることである。列強システムの侵入を拒絶する空間が、合衆国という一国家ではなく、西半球全体なのだというレトリックの中に、地球という球体を二つに分割して、その一方をアメリカ合衆国が代表するという意図が漏れ出しているのである。「西半球」という記号に「こちら側」という意味をつなげる操作は、この文章より前のいくつかの文章の中で周到になされているので見てみよう。まず「合衆国の市民たちは大西洋のあちら側 (their fellowmen on that side of the Atlantic) の人々の自由と幸福に対して友情あふれる思いをいただいている」(48-4) と述べて、大西洋を境として地球を二つに分割するしぐさをやってみせている。そしてさらに次のようなレトリックを使いこちら側の半球の人々の間の絆を強調する。「この半球に起こる動きの数々 (With the movements in this hemisphere) によって、我々は、必然的に、これまでより、より直接的な絆で結びつけられている (we are, of necessity, more immediately connected)」(48-7)。国境を超えた、より大きな半球という空間を一まとめとして自らの領域とする準備は着々となされていたのである。では、その結果、アメリカは外界にむけて何を主張したかったか？後に

モンロー・ドクトリンの神髄として常に引用される一文が以下の箇所である。

In the discussions to which this interest has given rise, and in the arrangements by which they may terminate, the occasion has been fudged proper for asserting as a principle in which the rights and interests of the United States are involved, that *the American continents*, by the free and independent condition which they have assumed and maintain, are henceforth not to be considered as subjects for future colonization by any European powers. (Monroe 7-4. italics mine)

「アメリカの（二つの）大陸」という言い方の中で複数形の continents が使われていることを我々は見逃すわけにはゆかないであろう。この言葉がモンローの口から発せられた瞬間、こちら側には南北アメリカ大陸の二つの大陸があること、ヨーロッパの植民地化の対象になることを拒否するのはその両方を含む西半球であることが宣言されたことになり、半球のレトリックはそのまま二つの大陸を包含する欲望の暴露となっていくのである。「こちら側」を指し示す signifier は、the United States という signified から、二つの大陸をふくむ western hemisphere という signified へと指示力を強化・膨張させ、アメリカ的拡大の欲望を代行していくのである。

グレッチェン・マーフィーはモンロー・ドクトリンの “extraordinary flexibility” (Murphy viii) を指摘している。彼女の言うところによれば、「(モンロー・ドクトリンの言葉は) さまざまな状況に適用することが出来て、その各々の場合において、もっとも複雑な状況に意味を与えるための見るからに単純な物語 (an apparently simple narrative) を提供する」(Murphy viii) ののである。マーフィーが指摘しているのは、モンローの言葉の汎用性であるが、そのレトリックの効果は記号レベルで検証するとさらにはっきりしてくるであろう。モンローの演説の中で、「こちら側」を指し示す記号は we → the United States → this hemisphere → western hemisphere と次々に signifier を置き換えていく。アメリカ的欲望は記号の指示対象を次第に広範囲の空間として獲得していく中にあらわれているのである。記号の支持力の源としての catachresis はモンローの言葉の中にその種をまかれ、以後、アメリカ合衆国の歴史的局面においてその都度、政治的思惑を付加される形で運用されてきたのである⁶。

4. 内包の欲動／大陸の欲望

アメリカ合衆国は独立後五十年あまりで西半球の取りまとめ役として振る舞い始めている。その後、モンロー・ドクトリンは、1904年にシオドア・ローズヴェルト、1912年にヘンリー・キャボット・ロッジ、1950年にジョージ・ケナン、そして2005年にジョージ・W・ブッシュらによって修正・再適用されてアメリカ的政治意識の表出およびその実施にさいして濫用されてきた⁷。西半球の東

半球からの独立というレトリックの裏に、北米大陸が南米大陸を包含し、保護という名のもとで支配しようとする思惑が隠されていることは、いわゆるモンロー・ドクトリンのねじれとしてこれまでも指摘されてきた。しかし、そのねじれの故にこそ、西半球の独立宣言としての環大西洋におけるアメリカの主権の主張は、アメリカ両大陸の反対側に広がる環太平洋における帝国主義の実現への契機となったのである。

以上、モンロー・ドクトリンは、アメリカ国家の政治的無意識を実行するために言語に行為遂行性を与える catachresis の宝庫となった点を述べた。ここで、そのアメリカが国家として独立するとき continent という語の catachresis が使われたという話に立ち戻ってみたい。先に述べたとおり、植民地側は自らの立つ地を continent と見なし、その上に立つという意識を共有して「大陸会議」を招集し独立を実行した。独立宣言という言葉を獲得する過程において、新大陸側の人々は、主権のありかとしての大陸に自分たちを自己同一化したのである。『コモン・センス』が当時の人々を独立という行為に導いたとすれば、それは、植民地側を指し示す小文字の continent を大文字の Continent で上書きすることによる心理的操作の効果の故でもあった。

ここで注目したいのは continent という言葉が含有する精神的意味である。この言葉のラテン語の語源は continen であり、con- (共に) + tenere (保つ) + ENT = 共に含む、という合成語である。とすれば、continent とは、連続した大地という地理学用語であると同時に、「包含する、すべてを内部にかかえこむ」ことを欲動する主体の立つ場所を指す言葉なのである。

アメリカへやって来たヨーロッパ人は、Continent (ヨーロッパ大陸) を去って新大陸で土地を開拓し、それを continent と見なすようになり、ヨーロッパに対するこちら側の自意識をはぐくん でいった。そんな中で、植民地人たちは自分たちが立つ陸地を大文字の Continent に置き換えて新大陸の中心性を獲得していった。アメリカという主体が自由・平等を世界に広める責務を負うエージェントとして振る舞い始めたその時期に、モンローの言葉はアメリカ人の心に大陸の中心性を目覚めさせたのだ。彼らは東半球からの分離・独立を唱えて自分たちの領域を西半球全体に重ねたのである。歴史を通じてモンローの言葉が様々な形で利用される過程で、America という言葉は、すべてを内に包含するパフォーマンスの中 continent(s) という記号と自然に結びつき、さらに球体としての地球規模の中で、その半球を自分たちの領域としたのである。

*

大陸的欲望の本質が中心性を軸とする全能感による空間の拡張にあるとすれば、それと対比されるのは周辺性である。大陸の対立語は何かと問われれば、それは島ということになり、島こそが周辺性の在りかということになる。とはいえ、大陸と島は地理学的には対立項であるとしても、その空間が人間精神にあたえる意味をみると、そこには予想外の共通点が浮かび上がってくる。

島とは、言うまでもなく海に囲まれた陸地である⁸。大陸上の場合なら連続した空間なので、人は果てしなく続く地上を移動することになる。一方、島の場合、人は、水に囲まれた陸地という囲われた空間「に入る」または「から出る」という形で自分の行為を意識する。「外」と「内」の往

復と言い換えてもよいかもしれない。島とは、侵入と離脱といった空間的断絶をとまなう閉鎖された場所なのである。

これほどの差異があるにもかかわらず、島という空間が大陸的欲望の実現の場としてかなり有効に機能することを我々は文学などを通して密かに感じている。一言で言えば、島とは、やって来た人間が陸地のすべてを一望することでその空間を「包含」し、そこにあるすべての生き物を「支配」できるという幻想を掻き立てる実験的場になりうるということである。そして、その幻想こそがまさに continent の語源が示していた「共に含む」という大陸的欲望を掻き立てるのだ。包含による支配が帝国主義的しぐさの基本であると言うならば、島とはその効果を個人で確認したい欲望を刺激する魅惑の空間であると言えよう。

19世紀半ば、こうしたテーマをめぐって書かれたのがガラパゴス諸島を題材にしたハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の「魔の群島」(“The Encantadas”)である。この作品については別稿で論じる予定であるので、本稿では、以下のことのみを指摘しておきたい。この作品は、「荒涼さではこの群島に匹敵するものがない」(Melville 765)と描かれた、ガラパゴス群島と目される島々をめぐる十のスケッチからなっている。人間がでてくるのは第六スケッチ以降の五つのスケッチであるが、島を出入りする人物たちすべては、動機は違っていても自らの意志でこの群島にやってくる。そこに繰り広げられるのは、他者を支配する欲望、独裁者となりたい衝動のドラマである。第7スケッチの犬王はチャールズ島で独裁者となろうと試み、反逆にあい失敗。魔王としてペルーへ運び去られるが、この話は「植民することの難しさ」(Melville 791)の事例となっている。第9スケッチの人間嫌いの隠者オバーラスは、自らの意志で島に住み孤立を選んで生きていたが、小銃を手に入れるや、「この恐ろしい島の主人であるという考えに凝り固まった彼は、孤立無援で自分の手中に陥る最初の人間に、自分の権力を試してみる機会を渴望する」(Melville 809)ようになる。彼は出会った黒人を奴隷として、島の独裁者となるがこれも失敗。島を捨てフィジー諸島へ向かって島を出立する。

島のもつ心理的効果、それは所有と支配という人間本来の欲望が、島という閉じた空間で一時的に実現できる誘惑にある。人は大陸を追い出されたのではなく、自らの意志で島にやってきて、その島で一時的な専制を試みる。そのとき、島は独裁者にとっての大陸である。しかし、専制者は必ずや失敗し再び島から出て行くことになる。こうして、島と大陸の間の移動については、どちらを起点としてどちらに向かうかの概念が反転し、その結果、大陸対島という二項対立も脱構築される。

アメリカは独立に至る過程で大陸としての自意識を立ち上げ、包含と支配の欲望を実現していったと先に述べた。しかし、それとは全く逆のセンチメントも実は、アメリカ国家の中にあったという洞察をここで導入してみたい。独立戦争当時『コモン・センス』の中で一番多く言及された箇所は次の箇所であった。

This new world hath been *the asylum for the persecuted lovers of civil and religious liberty*

from every part of Europe. Hither have they fled, not from the tender embraces of the mother, but from the cruelty of the monster; (Paine 84. italics mine)

イギリスという「怪物の残虐行為」から逃げて新大陸にやってきた人々は、自分たちを「市民としての自由、宗教の自由を愛する被迫害者」と規定する。つまり、新大陸とは、旧大陸から逃げてきた人々が求めた「避難所 (the asylum)」なのである。独立の理念の陰で植民地側のセンチメントをまとめ上げ独立へ向かわせたのは、被迫害者が持つ、見捨てられたという情念であった。アメリカという主体は Continent としての中心性を唱える中で自由・平等という理念の共和国を作り上げてきたが、一方、そこは、追放された人間たちが体を寄せ合う島という場所、中心から最も遠い場所でもあった。アメリカは、「大陸」という概念の裏に、島流しにあった人々が逃げ込んだ「島」としての表象を分かちがたく抱え込んでいたのである。アメリカは大陸なのか島なのか。21世紀の惑星的想像力はこんなところからもわき上がってくるのではないだろうか。

おわりに：再び globe —我々はどこに立っているのか？

最後に、今一度 globe という言葉に立ち戻ってみたい。この記号が時代とともに様々な指示対象と結びつけられてきたと述べたが、それは、そのまま各時代の世界観が地球規模で変遷していくプロセスを映し出す鏡となってきた。まず、コロニアリズム的世界情勢の中で globe は分割された二つの半球として認識された。半球のどちらか一方に立ち、自分側と相手側とを対立させるとき、半球的思考は、植民地化の欲望を刺激する枠組み、または、その欲望を牽制する際の枠組みのどちらかとなった。さらに、ポストコロニアルの時代からグローバリズムの時代へと世界は動いていき、地球という球体は均一化された資本主義的電脳空間に覆われていったのである。

20世紀から21世紀にかけて globe という記号が globalism という signified とつながれたとの認識の中、スピヴァクはそのような globe を廃棄せよ、そこに planet という signifier を上書き globalism を超越せよと提案した。しかし、その宣言がもたらされた2003年当時、planet という signifier を、スピヴァクが考える signified につなげた読者がどれほどいたであろうか？ 地上に暮らす人間にとって、planet という signifier は、空にあって輝く「惑星」という signified に結びつくのが自然であったはずだ。「現実社会にあるものを指し示すが、その記号がつながれるものとは別のものを指し示す」という意味で、スピヴァクの言う planet は、彼女が提案した時点において確かに catachresis であった。

では、その planet という言葉を、空にある「惑星」でなく、我々が立つ「地球」につなげるにはどうしたらよいのか。地球を惑星であると認識するためにしなくてはならないこと。それは、我々自身が地上から宇宙空間に移動して、そこから太陽系の「惑星」としての「地球」を見ればよい。緑色をした巨大な球体、これが地球である。とは言え、これは立ち位置の大逆転であり、天動説が

地動説に修正されるのと同じくらいの衝撃を伴う仕事である。スピヴァクは、それ故に、これを impossible な作業であり、invocation によってしか行い得ないと説明したのであろう。

今、人文系学問は総力をあげて、地球を惑星と見るための精神的飛躍を成し遂げるべく想像力をふりしぼる場を提供しようとしている。本稿は、そのためのささやかな寄与を願って書かれたものであるが、その方法は planetarity の意味を体験するために、スピヴァクが planet で上書きした地球をもう一度 globe で上書きすることを提案するというものである。学生用辞書で globe をひくと、そこには「地球儀」という意味がのっている。何百万分の一に縮小した球体は、我々が立ち位置を宇宙に変えたときそこから見える planet としての地球のレプリカだ。20世紀アメリカ資本主義が主導する globalism に覆われたこの地球という球体を、新たなる signifier としての globe で上書きするとき、globe の signifier は、globalism の霧を吹き飛ばし、新たなる signified としての地球の姿をと結びつくはずだ⁹。一旦は廃棄されたかに見える globe という語をめぐる指示対象の変遷を見てくると、planet の指示対象と globe のそれとが複雑に交錯しつつ、21世紀の今、さらなる想像力をかき立てられるのである。

注

本稿は2013年5月26日東北大学にて行われた第85回日本英文学会全国大会第八部門 SYMPOSIA 「21世紀における惑星的想像力—response/responsibility/acknowledgmentの連環」(司会・講師 下河辺美知子)において読み上げた発表原稿を大幅に加筆・改訂したものである。

¹ 2007年7月に来日した際、スピヴァクは連続公演会場での質疑応答の際に「惑星思考概念を批判的に再検討し、…以後はそのコンセプトを断念するに至っている」(異232)という。詳細については『モダニズムの惑星』232-233頁参照のこと。

² catachresis の定義としてはたとえば以下のようなものがある。

1 misapplication of a word, especially in a mixed metaphor

2 usage an existing word to denote something that has no name in the current language
(*Penguin Dictionary of Literary Terms and literary Theory*)

³ *OED* における globe の第一番の定義は A body having (accurately or approximately) the form of a SPHERE.

⁴ ベスブッチの発見を地図に入れ込むまでのプロセスについては *New Literary History of America* “1507 The name ‘America’ appears for the first time on a map”, ことに pp.3-5 を参照のこと。コロンブスが見つけた新しい陸地は最初アジアからのびた巨大な半島であると思われていたが、それが彼らにとって未知なる第四の大陸であることが確認されたとき America という名前がヨーロッパの地図に登録されたのである。

⁵ そもそもこの演説は、当初はドクトリンとして提示された文言であったわけではない。拙論「モンロー大統領は『ドクトリン』を提示したのだろうか? : 第七次年次教書の精神分析的解説」『成蹊英語英文学研究』第16号(2012年3月)19-37頁

⁶ ただ一回用いられる記号、それが America である。The United States of America の中の America ではなく、North/South America でもなくただ一語 America という記号がモンローの口から発せられている。そこに、二つの半球を分割する基準、アメリカ的空間と非アメリカ的空間の境界線引きの意味が込められている。詳細は拙論を参照のこと。(下河辺29-30)

- ⁷ モンロー・ドクトリンが四段階を経て修正されてきたことについては、巽孝之『モダニズムの惑星』（22 - 23）を参照のこと。
- ⁸ 世界最大の島はグリーンランド、その半分以下で第二位がパプア・ニューギニア、ボルネオとつづく。本州は世界第七位で、グリーンランドの10分の一ほどの面積である。また、大陸の定義については以下の URL を参照のこと。 <http://www.worldislandinfo.com/>
- ⁹ しかし、さらにおもしろいのは、その globe に、もう一つ、天体を映す「天球儀」の意味があることだ。地球の外の広大な宇宙が地球の表面にどのように映るのかの鏡としての天球儀を手にしたとき、globe という言葉は天体・宇宙という新たな指示対象を獲得する。

参考文献

Primary Source

The Monroe Doctrine was expressed during President Monroe's seventh annual message to Congress, December 2, 1823.

United States. Cong. Senate. *Proceedings*. 18th Congress. 1st sess. *Annals of Congress*. Comp. Joseph Gales. Washington: Gales and Seaton, 1856. 12-24. *A Century of Lawmaking for a New Nation, 1774-1873*. 01 May 2003. *American Memory*. Lib. of Congress. Web. 22 May 2013 <<http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=llac&fileName=041/llac041.db&recNum=3>>.

Secondary Sources

Albright, Robert G. "The Thematic Unity of Melville's "The Encantadas"" *Texas Studies in Literature and Language* 14.3 (1972): 463-77. Print.

Columbus, Christopher. "Letter to Luis de Santangel Regarding the First Voyage." *The Norton Anthology of American Literature*. Gen. ed. Nina Baym. 8th ed. Vol. A. New York: Norton, 2012. 35-36. Print.

Calder, Joshua, <http://www.worldislandinfo.com/>

Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature Across Deep Time*. Princeton: Princeton UP, 2006. Print.

Dimock, Wai Chee and Lawrence Buell eds. *Shades of the Planet: American Literature as World Literature*. Princeton: Princeton UP, 2007. Print.

Huang, Yunte. *Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics*. Cambridge: Harvard UP, 2008. Print.

Lester, Toby. "1507: The Name 'America' Appears for the First Time on a Map." *A New Literary History of America*. Ed. Greil Marcus and Werner Sollors. Cambridge: Harvard UP, 2009. 1-6. Print.

Martin, Lawrence. "The Geography of the Monroe Doctrine and the Limits of the Western Hemisphere" *Geographical Review* 30.3 (1940): 525-28. Print.

Melville, Herman. "The Piazza Tales" in *Herman Melville*. New York: Lib. of Amer., 1984. Print.

Murthy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U. S. Empire*. Durham: Duke UP, 2005. Print.

Okihiro, Y. Gary. *Island World: A History of Hawai'i and the United States*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 2008. Print.

Paine, Thomas. *Common Sense*. Ed. Isaac Kramnic. London: Penguin, 1986. Print.

Perkins, Dexter. *The Monroe Doctrine, 1823-1826*. 1927. Cambridge: Harvard UP, 1955. Print.

- . *A History of the Monroe Doctrine*. Little, 1955. Print. Rappaport, Armin, ed. *The Monroe Doctrine*. New York: Holt, 1964. Print.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. New York: Columbia UP, 2003. Print.
- . *An Aesthetic Education in the Era of Globalization*. Cambridge: Harvard UP, 2012. Print.
- Tanyol, Denise. "The Alternative Taxonomies of Melville's "The Encantadas"" *The New England Quarterly* 80. 2 (2007): 242-79. Print.
- Tatsumi, Takayuki. "Trans-ethnic, Post-hemispheric: From Faulkner to Yamashita" *AALA Journal* 15 (2009): 55-67. Print.
- Whitaker, Arthur P. *The United States and the Independence of Latin America, 1800-1830*. Baltimore: Johns Hopkins UP. Print.
- . *Western Hemisphere Idea: Its Rise and Decline*. Ithaca: Cornell UP, 1954. Print.
- 上村忠男・鈴木聡訳 『ある学問の死：惑星思考の比較文学へ』 みすず書房 2004年
- 下河辺美知子 「モンロー大統領は『ドクトリン』を提示したのだろうか？：第七次年次教書の精神分析的読解」
『成蹊英語英文学研究』第16号 2012年 19-37頁
- 巽孝之 『モダニズムの惑星：英米文学思想史の修辞学』 岩波書店 2013年